

国内の大学間連携による遠隔授業の試み

— 中上級日本語口頭表現クラスの事例から —

藤森弘子

キーワード：日本語教育、口頭表現クラス、双方向型遠隔授業、大学間連携

1. はじめに

我々の日常生活において、スマホやコンピュータを使って何かをすることは当然のこととなってきたが、日常生活のみならず、大学教育においても、eラーニングや遠隔教育といったICT（情報通信技術）を利用した教育の取り組みが行われるようになってきた（林 2008、小林他 2014,2015、小玉 2018、當作 2019、毛利 2019、ショー出口香 2019 等）。

保坂（2019）によると、遠隔教育は、1880年代に米国で遠隔地への郵送による通信教育から始まったとされ、その後テレビ・ラジオなどのマス・メディアを利用した放送教育へと進化し、現在のようなインターネットや通信衛星などのICTを利用した「eラーニング」へという変遷を辿ってきたという。昨今、少子高齢化、都市と地方との地域格差など様々な課題が日本社会の問題として存在するが、それゆえに国内だけでなく、海外からの留学生との学びの場の形成や交流がより必要とされる時代に入ってきたと言えよう。そのため、ICTの活用がますます期待されるころである。

本稿では、教育関係共同利用拠点事業でつながりのある大阪大学（以後、阪大）と本学（以後、東外大）との大学間連携のもと、「遠隔授業システムの共同開発」という位置づけで行った双方向型の遠隔授業の実践を取り上げ、考察を行うことを目的とする。

2. 遠隔授業を取り入れた授業実践

2.1 拠点事業による大学間連携

東京外国語大学留学生日本語教育センターは2012年より文部科学省から「日本語教育・教材開発・実践教育研修」の教育関係共同利用拠点の認定を受け、第2期目の活動に入っている。本学の他に、「筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 日本語・日本事情遠隔教育拠点」及び「大阪大学日本語日本文化教育センター 日本語・日本文化教育研修共同利用拠点」が全国の日本語教育の共同利用拠点として、それぞれの強みを生かした支援活動を行っている。いずれも遠隔教育の開発を行っている。

2.2 本学における遠隔授業の取り組み

本学におけるこれまでの遠隔授業の取り組みは、林（2008）、藤森（2012）、小林・何（2014、2015）など海外の大学と連携して、日本語母語話者と日本語学習者がスカイプやテレビ会議システムを用いて行った実践事例が報告されている。

2.2.1 林 (2008) の遠隔授業の実践

林 (2008) の遠隔の取り組みは、台湾の大学の日本語専攻学生 (4年生) と本学の中国語専攻学生 (3年生) とで学期中4回の討論会を実施し、同時に1対1のスカイプセッションも設けて、お互いの言語を学び合うというものである。討論会は、①日本人学生の中国語による発表→②日中の学生が中国語でディスカッション→③中国人学生の日本語による発表→④日中の学生が日本語でディスカッションするという流れで、テレビ会議システムを通して行われ、その後スカイプによる日台学生の1対1対話によるセッションが行われた。スカイプセッションでは、お互いに会話の内容をディクテーションすることで、自分の話した内容が相手に伝わっているかを確認し合い、訂正・助言をしあう。この方法はいわゆる「タンデム学習¹」の形態である。音声ファイルからディクテーションした文字データまで、すべてのデータは個人情報保持のため、LIN (2007) が開発したeラーニングシステムで保存された。そして、「発表準備」の段階時と遠隔授業実践後の「内容の反省」のものとを比較し、各個人の言語能力の向上の度合いを測ったところ、後者のほうが有意に産出文数が多いことがわかった。

本取り組みの特徴は、討論を行う学生が主体となり、協働学習及び双方向のコミュニケーションをとおして、互いの学習言語を「共学する」という点である。学習者へのインタビュー結果から、母語話者と直接コミュニケーションする時間が取れたことで、学習言語を運用する機会が与えられ、話す自信がついたとの評価を得ていることがわかった。アンケート結果からは、日本語・中国語学習者としてのやりとりが、相手文化への気づき・理解へと深まり、学習意欲が維持されていたのではないかと考察している。問題点としては、スカイプセッション時に相手の音声聞きにくかったり、PCがフリーズしたりしたことである。

2.2.2 藤森 (2012) の遠隔授業の実践

藤森・鈴木・藤村 (2011)、藤森 (2012) では、「異文化コミュニケーション教育」の実験授業として、タイの大学で日本語を専攻する4年生5名と、本学タイ語専攻の2年生1名、4年生2名、大学院生1名計4名とで、60分ほどの遠隔授業を試みた。まず準備の段階として、「事前タスク」でJPLANG²のLMS機能を使って、課題配信とその回答返信を行い、テレビ会議システムを用いて日本とタイとで「遠隔授業」を行った。その後「事後タスク」としてJPLANGによるアンケート送信及び回答返信という流れで行われた。事前タスクとしては、本学で開発した上級学習者用教材『日本事情テキストバンク』(2003)の中の「ジェンダー」テーマのテキストを選び、それを読んだ後、①日・タイ言語における男女言葉の違い、②同性と話す場合と異性と話す場合の話し方の違い、③言葉遣いについて親や先生から注意されたことがあるかの3点について、各個人の経験に基づいた発表と相手側との質疑応答により異文化理解を深めることを目的とした。藤森 (2012) では、遠隔授業の質疑応答部分で観察された日タイの学生同士のインターアクションに注目したところ、相手と意思疎通をスムーズに行うために、コードスイッチングしたり、相

¹ タンデム学習とは母語の異なる2人がペアになり、互いの得意な言語や文化を学びあうという学習形態のこと。「互恵性(reciprocity)」と「学習者オートノミー(learner autonomy)」の原則に基づいて実践される。

² 本学留学生日本語教育センターと情報処理センターとで共同開発した日本語学習者のためのeラーニング教材のこと (<https://jplang.tufs.ac.jp/>)。学習管理機能(LMS)も有している。

手にとってより理解しやすい表現に言い換えたりしている様子が見られたとしている。このように「個の文化」と接触することによって、「ことば」の意味が「文化」の意味として理解されていく過程がインターアクションを通して観察された。ただ問題点としては、音声の聞き取りが悪く、機械の不具合があり、ハード面の改善が必要であると指摘している。

2.2.3 小林・何（2014,2015）の遠隔授業の実践

小林・何（2014）では、本学の学部科目「言語教育学－日本語教育の実際」という授業を履修している学生18名（日本人学生9名、留学生4名、市民聴講生5名）と中国の大学で日本語を学んでいる学生11名（日本語能力試験N3相当3名、N2相当4名、N1合格が4名）とで遠隔授業を試みた。流れとしては、日本語教育に高い関心を持っている本学の学部受講生が初級から上級までの日本語教育の実際を講義形式で学びつつ、学期の最後に先の中国の大学生からの質問に答えるという流れである。遠隔授業当日は、日本側2名と中国側1名とで組になって、スカイプを通して中国側の質問に答えるという形態をとった。中国側からは、「初めて（自分が）学習している日本語で相手に理解されてとても嬉しかった」など動機付けが高められるような評価がみられた。日本側は、「教える側が日本語を理解していないと外国人学習者に伝えることはできないし、文化も合わせて教えないことには学習者の真の理解にはつながらないことを実感した」「これからの日本語に対する姿勢が変わるきっかけになる実践だった」などの気づき及びそこから今後の自身の方向性を示すようなコメントがみられたとしている。

小林・何（2015）では、先の取り組みが課外であったのに対して、当該の取り組みは日中両大学の科目のシラバス・カリキュラムに組み込まれ、正規授業内での実践となっていた。ここでは学期内3回の遠隔授業が実施され、各回の授業へ向けて準備する内容などが共有されていた。両者のアンケート結果から、様々な気づきがみられ、異文化理解ひいては自文化理解の機会になったことが窺えたとしている。「リアリスティック・アプローチ」という新たな教師教育の視点では、実習生の経験を学びの出発点とするという発想で、今回のような遠隔授業を通して、教師養成の知識獲得の前に、リアルな実践・行為を経験することの重要性を指摘している。

以上のように、これまでの本学での遠隔授業実践では、自文化と他文化及び各々の文化規範に基づいた社会文化的行動等との対照比較が焦点となっているが、本稿では日本国内に留学中の留学生たちが、「東京」と「大阪」という物理的に離れた異なる環境で、「同時に授業に参加する」という特徴がある。両者は日本に留学しているという共通点はあるものの、それぞれ別の地域で生活し、学んでいるという点が異なる。そこで、地域性を意識したテーマを取り上げることとし、東京・大阪という地域で特有の祭り文化やおすすめスポットを紹介しあうというテーマにした。そのため、学習者の母文化を紹介するということはポイントにしなかった。

3. 中上級口頭表現クラスのシラバス・カリキュラム

3.1 全学日本語プログラム（基礎日本語）の開講クラス

本学では、毎年70を超える国・地域からの留学生を約600名受け入れており、全学生数に占める留学生の割合は日本の大学の中ではトップレベルで、国際性豊かな環境となっている。そのう

ちの半数に当たる約 300 名の留学生が「全学日本語プログラム³（基礎日本語）」で学んでいる。【表1】は全学日本語プログラムの開講クラス一覧である。2019 年度より同プログラムは本学の世界教養プログラム⁴の中の他の外国語科目と同様、地域言語科目の一つ「基礎日本語」として位置づけられている。

〈レベル別開講クラスとクラス番号一覧〉

レベル	総合	技能/トピック別 (週1コマ)							漢字	発音
初級1 101~	101 (5コマ)				文章 114	口頭 115				
初級2 201~	201 (5コマ)				文章 214	口頭 215			漢字 901	
中級1 301~	301 (5コマ)	文法 311	読解 312	聴解 313	文章 314	口頭 315				
中級2 401~	401 (5コマ)	文法 411	読解 412	聴解 413	文章 414	口頭 415			漢字 902	
中上級 501~	501 (5コマ)	文法 511	読解 512	聴解 513	文章 514	口頭 515				
上級1 601~	601 (3コマ)	文法 611	読解 612	聴解 613	文章 614	口頭 615	時事 616		漢字 903	
上級2 701~	701 (2コマ)	文法 711	読解 712	聴解 713	文章 714	口頭 715	時事 716	ビジネス 718		発音 911
超級 801~			クリティ カル・ リーデ イング 812		アカデ ミック・ ライテ イング 814			ビジネス 818	漢字 904	

※文法 = 「語彙・文法」、文章 = 「文章表現」、口頭 = 「口頭表現」、時事 = 「時事日本語」、ビジネス = 「ビジネス日本語」
 ※技能・トピック別クラス、漢字、発音：1コマ/週

【表1】2018 年度秋学期全学日本語プログラム開講クラス一覧⁵

今回遠隔授業を試みたクラスは、筆者が担当する中上級レベルの技能別クラスの一つ、「中上級口頭表現 (515) クラス」である。

³ 2004 年度より、本学の様々なカテゴリーの留学生、即ち交換留学生、国費研究留学生、私費研究生、日研究生、教研究生等を対象に、2016 年度からは学部正規生も加えて学習者の日本語レベルや目的に応じて履修できる「全学日本語プログラム（基礎日本語）」が開講されている。同プログラムのシラバスは、本学で開発した「アカデミック日本語 Can-do リスト」http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/development/ajcan-do/cando_list/ が参照されており、教育の可視化及び質の保証が図られている。

⁴ 基礎的な教養を身につけるための学部間共通プログラムで、第 1 年次・第 2 年次を中心に全学生が学ぶ。

⁵ http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/program/program_ja.html より抜粋。

⁶ AJ Can-do リストは 4 技能 5 項目に分かれている。技能のうち、「口頭表現」は「独話（プレゼンテーション、発表）」http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/development/ajcan-do/cando_list/04_koutou/zentai_koutou_dokuwa.html と「対話（インターアクション）」http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/development/ajcan-do/cando_list/04_koutou/zentai_koutou_taiwa.html に分かれており、Can-do 目標、目標細目、課題タスク、テーマ・トピック例が記述されている。

3.2 AJ Can-do リスト中上級口頭表現のシラバス指標

まず授業のシラバスを作成する際に参照した「アカデミック日本語 Can-do リスト（以後、AJ Can-do リスト）」の口頭表現⁶の Can-do 目標及び細目は以下のとおりである。

中上級口頭表現【独話】の Can-do 目標及び細目

- 社会・文化的なことについて7分程度の発表ができる。
 - トピック例：自国のニュース／人口問題／経済問題
 - 談話構成：社会・文化的なテーマについて、導入・本文・まとめの構成で話せる。
 - 結束性（接続詞・指示詞）：・話を展開させるための接続表現（例：一方、つまり、その上、など）が適切に使える。
 - ・「これ」「それ」を使用した文脈指示を正しく使える。
 - 情報／意見の伝達：社会・文化的なことについて、原因や理由を順序立てて話せる。
 - ストラテジー：絵や写真などを使って順序だてて説明できる。

中上級口頭表現【対話】の Can-do 目標及び細目

- 社会・文化的なことについて質問内容を事前に準備して、インタビューやディスカッションができる。
 - 活動形態：インタビュー、ディスカッション、ロールプレイ
 - トピック例：日本の不思議な習慣、自国の社会問題
- 依頼・詫び・約束をするなど、適切な語や表現を使って会話が続けられる。
 - 活動形態：依頼・誘い・詫び・約束などのロールプレイ
 - 談話調整：・相手に応じてインタビュー、ディスカッションで質問したり、相手から得たい情報を概ね得ることができる。
 - ・丁寧な場面とくだけた場面の違いを理解し、依頼・詫びなどの会話が続けられる。
 - スタイル：常体と敬体の基本的な使い分けができる。
 - インターアクションのためのストラテジー：聞き手の反応を見ながら、あいづちやフィラーなどを使って会話が続けられる。

3.3 中上級口頭表現（515）クラスのシラバス・カリキュラム

本稿で扱う中上級口頭表現（515）クラスのシラバス・カリキュラムは先の AJ Can-do リストの指標に基づいて設計したもので、2018 年度秋学期に行われた（【表 2】参照）。学期の前半は口頭表現対話の「勧誘」「許可」「依頼・指示」などの機能会話の項目を取り上げ、相手との社会的距離や親密度によって適切なやりとりができるようロールプレイ練習を行った。口頭表現独話の Can-do 目標は2点ある。1つ目は「自分が住んでいた町」について ppt を使って発表するという活動で、自己の身近な町の特徴を客観的に捉え、他者にわかりやすく伝えられるようにすることを目標とした。2つ目は、授業外で日本の衣食文化・衣食習慣について日本人にインタビューするという課題を出し、授業内ではそのインタビュー結果を自国との比較をしつつ、考察を行い、パワーポイントでグラフを示しながら発表してもらった。その後、グループでディスカッションも行った。

回	日付	テーマ・トピック	活動
①	10/2	自己紹介で相手に好印象 ^{こういんしょう} をあたえる	スピーチ
②	10/9	「一緒に行ってみない？」— 勧誘 ^{かんゆう}	ロールプレイ
③	10/16	「これ、使わせてもらってもいいかなっ」— 許可 ^{きょか}	ロールプレイ
④	10/23	「そこをなんとか」— 依頼・指示 ^{いらい しじ}	ロールプレイ
⑤	10/30	「～を始めたきっかけは何ですか」	インタビュー
⑥	11/6	自分が住んでいた町について発表	スピーチ
⑦	11/13	今住んでいる「東京」のトリビア ^{さか} を探す ・インタビューのしかた	グループディス カッション
⑧	第1回 AL ⁷	日本の衣食文化・衣食習慣について日本人及び留学生に インタビューする	一人またはペア でインタビュー
⑨	11/27	インタビュー結果と考察の報告（自国との比較）	発表・質疑応答
⑩	12/4	インタビュー結果と考察の報告（自国との比較）	発表・質疑応答
⑪	12/11	インタビュー結果と考察の報告（自国との比較）	グループディス カッション
⑫	12/18	遠隔授業の3つのテーマについてグループで話し合う	グループディス カッション
⑬	1/8	遠隔授業のリハーサル	グループ別発表
⑭	第2回 AL	「食文化」「おすすめスポット」「祭り」について各担当 グループで話し合い発表内容を決定する	発表練習
⑮	1/15	大阪大学との遠隔授業：3つのテーマについて 発表1（阪大）→質疑応答→発表1（東外大）…	発表・質疑応答

【表2】2018年度秋学期中上級口頭表現クラスのシラバス・カリキュラム

遠隔授業は、この学期の最後に行われた。詳細は次章で述べる。

4. 遠隔授業の流れ

阪大との遠隔授業は以下の要領で実施された。

- ①実施日：2019年1月15日（火）9：00～10：00
- ②場所・方法：阪大、東外大ともテレビ会議システム⁸を用いて、教室で行った。
- ③参加者：阪大側は学生8名及び教員1名。内訳は、博士前期課程4名、博士後期課程4名で、日本人学生2名、中国3名、タイ、ベルギー、ハンガリー各1名。
東外大側は学生20名及び教員1名。内訳は学部交換留学生16名、研究生1名、日研生1名、

⁷ ALはアクティブ・ラーニングのことである。

⁸ Polycomを用いて、会議用広角webカメラを使用した。クラス全員が相手側に映るように、発表の際は発表者及びpptのスライドが大きく映るように、IT教務補佐にカメラの操作を依頼した。

教研究生1名、委託留学生1名で、中国3名、ウズベキスタン3名、ブラジル2名、タイ2名、エジプト2名、台湾2名、韓国、米国、マレーシア、モンゴル、スロバキア、オーストリア各1名。

- ④授業の流れ：事前準備としては、各大学で3つのトピック別に予めグループを作り、各グループでどのような内容の発表にするかについて話し合い、当日は代表者が発表を行い、その後質疑応答という流れで行った。

当日の流れは以下のとおりである。

◆第1セッション：「大阪の食文化」発表5分→「東京の食文化」発表5分
→質疑応答

◆第2セッション：「大阪のおすすめスポット」発表5分→「東京のおすすめスポット」
発表5分→質疑応答

◆第3セッション：「大阪の祭り」発表5分→「東京の祭り」発表5分
→質疑応答

- ⑤東外大では授業終了後、遠隔授業について以下の4点から書くように、学期末レポートを課した。

- 1) 大阪大学との遠隔授業の概要
- 2) 面白かった点
- 3) 問題点・課題
- 4) 次にまた遠隔授業をやるとしたら、どのようなテーマや方法が良いか

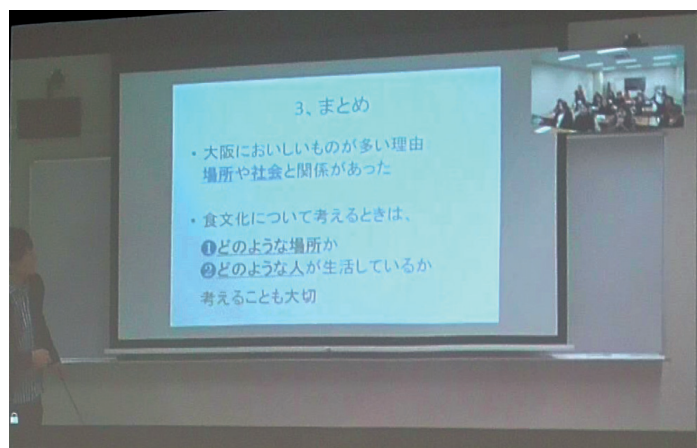
5. 分析と考察

5.1 阪大の発表と東外大の発表の比較考察

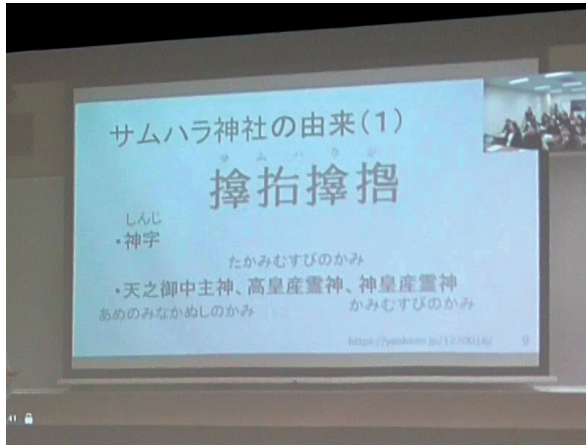
5.1.1 阪大の場合

阪大ではすでに以前から遠隔授業を実施しているが、今回の参加者は初めての経験だそうである。しかし、阪大側の教員は遠隔授業に慣れているようで、ファシリテーターとして非常に巧みに両大学のやりとりの進行を促していた。

まず、最初の「大阪の食文化」の発表は日本人大学院生によって行われた。話すトピックに応じて1枚のスライドに、短文で5行程度、写真は大きく1



【図1】「大阪の食文化」説明時の「まとめ」スライド
枚のみを収め、遠隔のカメラを通して見えるような視聴者への配慮がなされていた。例えば、「今日は、…の点について発表します」「ではまとめをします」といったメタ説明のあとにスライドが出てくるといった具合である。最後のまとめのスライドでは、なぜ大阪においしいものが集まったのか、場所的要因と社会的要因に分けて説明したのち、食文化について考えるときは、そこがどのような場所（海・川があり、平地も多く田畑が多かったため農業・漁業がさかんだった）



【図2】サムハラ神社の由來說明スライド

れる。平易な日本語を使っているが、民俗学的なアカデミックな内容であった。まず、「パワースポット」の語義、辞書的意味、日本の江戸時代の文献によると昔は何と呼ばれていたかを説明した後、大阪にあるパワースポットの一つである「サムハラ神社」を紹介した。一般には知られていない、研究者ぐらいしか知らない神社を紹介し、その命名の由来、サムハラ神社の指輪が三千円で売られていることなど、ローカルな話題も入れて説明していた。今回の東外大側のレポートのコメントにも「サムハラ神社」の存在を知らなかったが、由来を知ってぜひ行きたいという回答が多く、特に印象に残ったようだ。

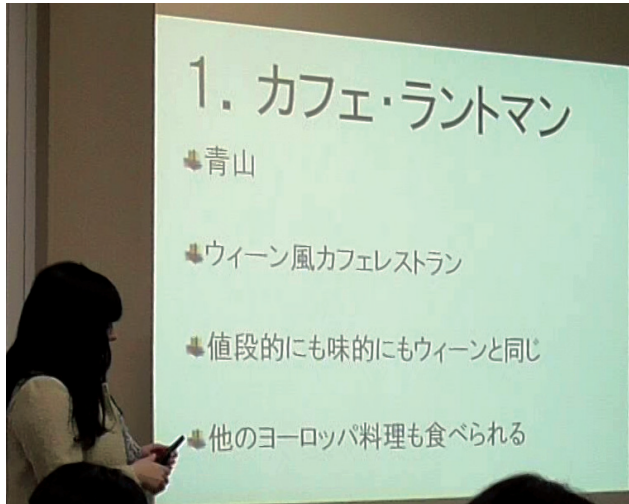
3番目の発表は、大阪の祭りの紹介でベルギーの大学院生によって行われた。祭りには「みこし」と「山車(だし)」があるが、山車は西日本にしかないので、山車の中でも大阪で有名なだんじり祭りを紹介することにしたという説明から始まった。「みこし」は神が乗り移ったもので、「山車」は神に見せて喜ばせるものということから、両者の形、様式などの相違点をスライド1枚ごとに示しながら説明していた。質疑応答時に東外大から、「男性しか参加できないそうだが、山車の上に乗って踊る人はどのように選ばれるのか」という質問が出たのに対して、「若いイケメンが選ばれる」という答えで笑いが起きて、場が和んだ。【図3】のように、スライドを見せながら説明する際、指示棒を使って、話している部分の文または絵図を示して相手側の視点がそちらにいくように促していた。これは阪大側の教員の助言によるものだそうである。



【図3】大阪だんじり祭りの説明

5.1.2 東外大の場合

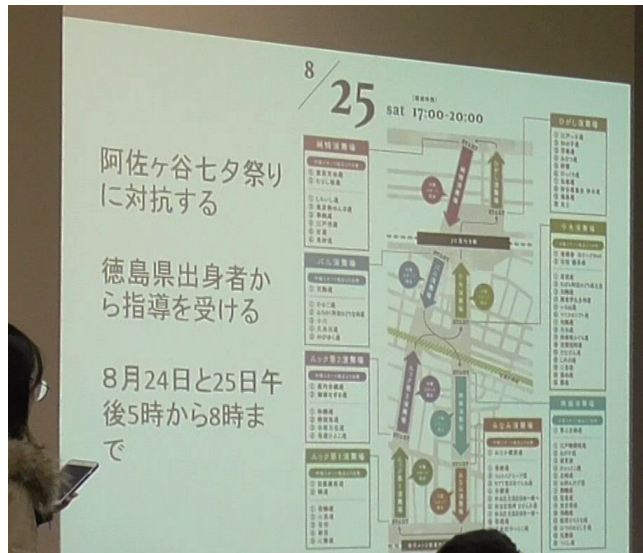
今回、東外大の学生たちにとって遠隔授業は初めての経験である。そのため、相手側にカメラをとおしてどのように見えるか、聞こえるかなどの準備ができていない点がいくつか見られた。1つ目の「東京の食文化」では、3人が前に出てきて順に発表した。まず首都東京には「ソウルフー



【図4】東京の食文化の紹介

が、多くの人が訪れるという一般的な説明に終わってしまい、その場所の由来、地理的・歴史的な視点による内容はなかった。「秋葉原」の説明も同様で、多くの若者に人気で、アニメ・ゲームショップ、電気店がたくさんあるという説明だけであった。しかし、質疑応答時には、東外大から阪大側に「秋葉原と同じような若者に人気がある場所はあるか」という質問が出た。別の地域にも同じような機能の町があるかどうかを尋ねると、一段階踏み込んだ内容であった。阪大側からは「大阪の日本橋（にっぽんばし）という街が秋葉原に相当するという返答があり、双方向のやりとりから新情報を得ることができたことがわかる。

3番目の発表は「東京の祭り」で、中国の学生が代表で発表した。「高円寺阿波踊り」と「王子狐祭り」を紹介したが、インターネットで調べた説明文をそのまま読んでいるような感じであった。声も小さめで、聞き取りにくい部分もあった。【図5】のスライドを見ると、左側の上から1つ目と2つ目の文には、近隣の阿佐ヶ谷七夕祭りに対抗するため、東京在住の徳島県出身者が始めたものだという、高円寺阿波踊りの由来が書かれている。しかし、その下には、祭りの開催日が載せられており、由来と祭りの開催期間の説明とが同じスペースにあり、わかりにくくなっている。その右側には、高円寺駅近くの阿波踊りが行われる道の地図が示されており、左右の情報の内容が一致していない。そのため、スライドをみても何の情報も瞬時に読み取りにくくなってしまった。



【図5】東京の「高円寺阿波踊り」の紹介

小森他（2016）によると、阪大でのこれまでの経験から遠隔授業の場合、アニメーション機能は使用しないほうが良いと指摘している。また、相手の日本語レベルに応じて語彙の選択や授業によっては事前に語彙リストを作成し受信側に送付する、受講生の集中力を持続させるために講義内容に関する簡単なクイズを挟むなどの配慮を行った事例が報告されており、遠隔授業では、

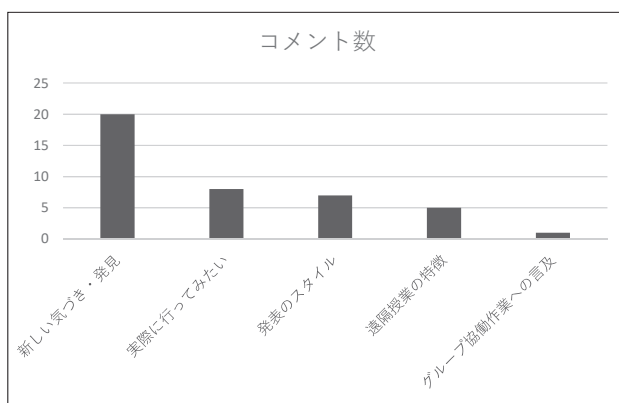
通常の授業のときよりも相手の日本語レベルに合わせた説明の仕方や準備態勢が必要だと言えよう。

5.2 東外大の学期末レポートからの考察

東外大の参加学生に対して、本遠隔授業について学期末レポート課題を課した。20名の参加者のうち、15名から提出があった。ここでは、そのレポート内容のうち、「面白かった点」「問題点・課題について」「またやるとしたら、どのようなテーマや方法が良いか」について考察する。()内は参加学生の番号である。

5.2.1 面白かった点について

遠隔授業終了後の学期末レポートの「面白かった点」について、どのような視点からコメント



【図6】学期末レポート「面白かった点」のコメント内訳

しているのかをみた。【図6】を参照されたい。最も多かったコメントは、各グループが発表した3つのトピックの内容に対する「新しい気づき・発見」であった。例えば、「「だんじり祭り」に女性が参加できないことを聞いて、韓国にはそのような性別で分ける祭りはないので面白かった」(学生2)、「食文化、東京も大阪も食事の種類が多かったが、その理由は違う」(学生14)、「外大生と阪大生が関西地域や関東地域のいろいろな違う点を紹介してくれて面白かったと思う」(学生16)、「どう

して大阪は食べ物おいしいと言われているのか、また昔から天下の台所と言われていたなどのことが分かった」(学生18)のように、新しい情報を得た気づき・発見についてコメントしている。次に多かったのが、その気づきから「実際に行ってみたい」というコメントであった。例えば、「東京側の発表でもいろいろな店の名前が出てきたので、休みに行ってみたいと思う」(学生7)、「両方の発表で知らないことも多かった。大阪に旅行に行ったら、説明してくれたサムハラ神社参拝と大阪の伝統的な料理を食べてだんじり祭りに参加したい」(学生11)というコメントがあった。これは発表者が単なる観光地の紹介ではなく、日本文化研究というアカデミックな視点を通して紹介したことが、実際に「行ってみたい」という動機づけにつながっていることがわかる。一般の観光ガイドブックでは得られないような、この授業に参加できたからこそ得られる希少な情報である。

3番目としては、以下のような東京と大阪の「発表のしかた・スタイル」についてのコメントである。

- ・「発表のしかたが両者異なるのが面白かった。阪大のほうは話し方が面白く、東京のほうは真面目だった」(学生4)
- ・「阪大は大学院生で先輩で、日本語能力が高いのにわかりやすく説明してくれた。先輩の正しい日本語を聞いたおかげで自分の日本語能力も上がってきたのではないかと思う」(学生9)
- ・「面白かったのは歴史や背景も紹介してくれました。話を説明している時、相手の気持ちや感

想も聞きながら、聞き手にとってはとても優しかった。おすすめスポットを紹介した時に大阪の人でもあまり知られていないところを紹介してくれ、びっくりしたが行きたくなくなった。さらに、調べて情報だけではなく、自分で体験したことをシェアし、発表の仕方もイラストを使ったり、動画を見せたりしたので、わかりやすかった。自分の目で見に行きたくなった」(学生 20)

このように、阪大側の発表を、冗談も入れて、相手に気配りをしながら話していると評価している。その上、先輩であることにも言及している学生のコメントがあった。筆者が観察したところでも、東外大側はやや緊張気味で、スクリプトを読みがちの学生もいたのに対して、阪大側は、相手に向かって質問を投げかけながら、新情報を提供するスタイルの発表は非常に聞き取りやすく、内容理解を促進し、より興味を引いていたと思われる。

そのほかには、遠隔授業という形態についてコメントしているものもみられた。例えば、「この遠隔授業を受けた学生は普通の授業と違って次の4つの点で日本語能力が高められた。①聞く能力、②まとめる能力、③話す能力、④集中力」(学生 12) と評価しているコメントや、「距離と移動時間の問題が解決できた。遠隔地とのコミュニケーションを可能にした」(学生 16) のように ICT の利点を述べたものや、「全体的には遠いところからと感ぜられなくいっしょにいるみたいに話と質問などができて設備がよかったのではないかと思う」(学生 18) と今回の遠隔授業がおおむねスムーズであったことを評価しているものがあった。

5.2.2 問題点・課題について

最も多かったのが、「音声・マイクの問題」でよく聞き取れなかったというコメントで4件あった。「パワーポイントのスライドが見えにくい」という指摘も2件あった。阪大側は教室のうしろの大きなスクリーンにPPTスライドを投影していたため、よく見えたが、東外大側は、教室の側面の壁に映し出していたので、見にくかったという指摘があった。「参加人数」の問題も挙げられた。「人数が多いので、もっと話したかったが一人ずつ話す時間がなかったことが残念である」というコメントであった。「1時間だけというのは短すぎる、質問以外の話をする時間が欲しかった」という回答もみられた。他には、「遠隔授業までに、グループごとに集まって発表内容を検討するのだが、なかなか全員が集まらなかった」というコメントもあり、課外での協働学習にはグループ間の差がみられた。また、グループメンバーは教員側で決めたので、「グループが決められていたことが問題だ」と指摘するものが1件あった。一方で、問題点なし、遠隔であっても顔がよく見えてよかったといったポジティブなコメントもあった。

5.2.3 また遠隔授業をやるとしたら、どのようなテーマや方法が良いか

【表3】に〈テーマ〉と〈方法〉に分けて列記する。

〈取り上げたいと思うテーマ〉

- ・方言、若者言葉、今流行っている言葉や俗語
- ・自国の説明、大学・学生生活、日本での生活や暮らしを紹介する
- ・ネットで調べればわかるような情報ではなく地元の人しか知らないような店の紹介
- ・日本の歴史、日本の伝統文化・習慣、考え方、日本の社会
- ・日本語の覚え方

〈方法〉

- ・クラスの学生全員が発表するようにする
- ・九州や北海道などにある他大学と遠隔授業を行う
- ・ゲームをやる
- ・1回だけでなく、何回か続けてやる
- ・次回も同じ内容でもいい

【表3】次回取り上げてほしいテーマ及び方法

取り上げたらいいと思うテーマとしては、「方言、若者言葉、流行語、俗語」などの提案があった。日本語と行ってもバラエティーがあることに気づき、言語により敏感になったように思われる。また、自分たちの大学生活や日本での日常生活をテーマに取り上げると言った経験主義的な提案に対して、より客観的に日本の歴史や伝統文化、日本社会を捉えたテーマにしてはどうかという意見もあった。

方法については、東外大側の参加者が20名という数で、一度も発言しなかった学生もいたためか、全員が話すようにしたほうがいいという意見が出た。また、今回初めて遠隔授業を経験して、1回きりで終わるのではなく、何回もやりたいというコメントや、大阪だけでなく、九州や北海道の大学ともやりたいといった意見もみられた。他には、違う大学の学生に会う機会があまりなく、遠隔授業はとても役に立つ授業だったので、今後も続けてほしいというコメントもあった。

6. まとめと課題

今回の取り組みでは、東京と大阪という地域性の異なる場所で学んでいる留学生がそれぞれの地域の食文化・おすすめスポット、祭りを紹介するという情報にギャップのある、双方向型遠隔授業を行った。そして、授業の録画の観察及び期末レポート内容から遠隔授業の効果と可能性について考察した。その結果、日本文化を一つと捉えず、「個としての文化」（佐々木 2002, 藤森他 2002）を通して新たな気づき等が見られた。以下はそのまとめである。

- ① 「個の文化」の視点を通して地域の文化をみることにより、双方にとって新しい気づきや発見があり、自らが新情報をより深めていきたいという動機付けにつながると言える。
- ② テーマを共通にしたことから内容重視の発表となり、質疑応答による双方向のインタラクティブがあることで、対話重視の協働学習となることが示唆された。
- ③ パワーポイントを用いるのは有効だが、見やすい文字の大きさや一面に載せる文字数や絵図の数など、相手の理解を促進するような配慮が必要であることがわかった。
- ④ 遠隔授業を1回きりにするのではなく、連続性を考慮したほうが良い。
- ⑤ グループごとの協働学習を取り入れつつ、しかも各人が発言できるシステムの開発が望まれる。

阪大ではすでにいくつかの遠隔授業の取り組みが行われている（小森他 2016）。今回の阪大側の発表者は全員大学院生であり、在日期间が東外大側と比べて長い上に、専門性の高い知識を持っているため、発表時にも各人の専門に寄ったアカデミックな視点で話されていた。アンケート結果に「阪大は大学院生で先輩で、日本語能力が高いのにわかりやすく説明してくれた」とあるように、専門性がある内容であるにもかかわらず、わかりやすい日本語で説明している点が、今後遠

隔授業を企画する際、参考になると言えよう。

今回の東外大側は交換留学生が多く、学部生であることから、大学院レベルほどの高い専門性を持つまでには至っていない。しかし今回の授業で「先輩の正しい日本語を聞けたお陰で自分の日本語能力も上がってきたのではないかと思う」というコメントがあったように、阪大側の先輩の発表に接することで、将来のキャリアモデルを見たともいえるだろう。

今後の課題としては、クラスメンバー全員が発言できるほうが良いという要望もあったので、全体の授業に加えて、1対1のスカイプセッションを行うといった林(2008)のような方法も取り入れていくことも考えられる。また、今回のような1回限りではなく、複数回の交流があることが望まれる。そのためには両者のシラバス・カリキュラム等の調整が必要となろう。今後も継続してICTを活用して、距離が離れていても交流が広がるような授業を実現させていきたい。

参考文献

- 小玉安恵(2018)「オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試み：異文化間で活躍できる人材の育成をめざして」『日本語教育』169号, 日本語教育学会, 93-108
- 小林幸江・何美玲(2014)「Skypeを使った日本語教育の授業の試み—中国福州大学との協働実践—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40号, 137-152
- 小林幸江・何美玲(2015)「日中間のスカイプによる双方向遠隔授業の目指すもの—リアリスティック・アプローチの視点から—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41号, 1-15
- 小森万里他(2016)「大学間連携による Skype を用いた日本文化遠隔講義の試み」『第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』香港日本語教育研究会
- 佐々木倫子(2002)「日本語教育と「文化」概念」『21世紀の日本事情』第4号, 21世紀の『日本事情』編集委員会, 146-155
- ショー出口香(2019)「インターネットを活用した異文化間コミュニケーション能力育成をめざした日本語学習活動」『ICT×日本語教育 情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房, 112-121
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(2003)『日本事情テキストバンク』CD-ROM版
- 當作晴彦(2019)「ネットワーク時代の言語教育・言語学習」『ICT×日本語教育 情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房, 2-21
- 藤森弘子・藤村知子・鈴木美加・尾方理恵(2002)「『日本事情』テキストバンクの作成—新しい日本事情授業構築の模索—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会, 92-97
- 藤森弘子・鈴木美加・藤村知子(2011)「異文化コミュニケーションを意識した教育—タイと日本の大学生をつなぐ遠隔授業の試み—」『異文化コミュニケーションのための日本語教育1』高等教育出版社 224-225
- 藤森弘子(2012)「異文化理解を目指したインターアクション教育に関する一考察—遠隔授業での相互作用に着目して—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38号, 23-38
- 保坂敏子(2019)「遠隔教育が開く日本語教育の可能性」『日本語教育における遠隔教育の現状と今後の展望』シンポジウム発表資料
- 毛利貴美(2019)「Skypeによる遠隔セッションを取り入れた実践」『ICT×日本語教育 情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房, 48-83
- 林 俊成(2008)「日中遠隔協働授業における語学教育の実施とその評価」『東京外国語大学論集』76号, 191-212
- Chunchen LIN(2007)“The development of collecting digital portfolios for Chinese learners of Japanese on an e-learning system”, AECT Leadership and Technology 2007 Convention, Poster session, 2007/10

(ふじもり ひろこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

Case Study of a Pre-Advanced Japanese Oral Expression Long Distance Class Organized by Universities Partnership in Japan

FUJIMORI Hiroko

KEYWORDS: Japanese-language education, oral expression class, interactive distance learning, inter-university partnerships

Just as smartphones, computers, and other forms of IT technology have become a part of our daily lives, so too is ICT (information communication technology) being utilized in university-level education in the form of e-learning and long-distance education. Through an inter-university partnership, Osaka University and Tokyo University of Foreign Studies (TUFS) worked together to create a long-distance class with the participation of overseas students in a pre-advanced Japanese Oral Expressions class, with such topics as *food culture*, *recommended tourist sites*, *festivals* introduced by the participants. In this study, video-recordings of the course, and the results of questionnaires given to the participants, were analyzed in order to consider the significance of the class. The results of this analysis demonstrated that the Osaka University students' presentations utilized Japanese which was at once more sophisticated but also simpler to understand, that their slides were more concise, and that overall they put more successful effort into making their presentations easy for the listeners to understand. On the other hand, the TUFS students, who in contrast with the Osaka University students were involved for the first time in this type of course, tended to pack too much information into their slides, repeat information they obtained on the internet verbatim, among other problems. In their reports, participants made a significant number of comments regarding the new things they learned from the presentations, as opposed to general information about Osaka. It was clear that introducing realia into courses involving interaction is quite valuable, and the potential for further growth is significant.